

支部の役割



井村 久 則

多くの会員にとって日本分析化学会への入会の動機は、年会あるいは討論会への参加ではなかろうか。会員が本会の一員であることを意識するのは、このほか、支部の講演会、セミナー、講習会などで聴衆あるいは講演者として参加するとき、機関誌や論文誌の講読あるいは投稿や審査のとき、さらには、支部や本部の運営に参画するときなど様々であろう。

何れにしても、会員にとって支部は身近な存在である。年会、討論会は本部の事業であるが、実際に企画・運営に当たるのは支部および地区の会員であり、準備期間も含めると1年以上にわたって支部は活性化され、会員相互の絶好の交流の機会ともなる。また、最近は何れの支部でも、所謂“若手の会”の活動が活発であると聞く。かつて、東北支部と関東支部の分析化学若手の会のお世話をさせて頂いたことがあるが、自称若手であればどなたでも参加できるオープンな会を目指した。両支部のご理解のもと、主催は分析化学若手の会で、博士課程の学生が世話人を務めるなど自主性と若手同士の徹底的な討論が特徴だったと思う。

中部支部でも、分析化学中部夏期セミナーと銘打って、夏休みの期間に2日間にわたり高専・大学院生の若手から大学・高専の教員、企業・法人に所属する社会人までが一堂に会する交流会がある。特別講演、企業の新製品講演、学生のポスター発表のほか、数年前までは毎年ソフトボールの地区対抗戦があった。夜は年齢や所属に関係なく、皆が思い思いに集って交流の場が生まれる。また、支部の中央部に位置する高山市で開催される高山フォーラムが、もう一つの若手交流会である。こちらは学会発表の経験もない大学4年生を含む学生が中心で、若手の教員によって運営されており、毎年盛況で支部の活性化に重要な役割を果たしている。

このように、いくつかの支部を渡ってみて、本会が支部の活動に支えられていることを実感している。昨年、学会のさらなる活性化を目指し学会活性化戦略委員会の提言が出された(ぶんせき, 2013, 168)。根底には、少子化による会員数の減少があるという。文部科学省によると、18歳人口は1989年(平成元年)からの20年間で193万人から124万人に急減し、さらに2018年から再び減少し2028年には103万人となる。40年間でおおよそ半減することになる。本会は学生会員の割合が他の学会に比べて低いことを考えると、分析化学を志す若者の育成は最も重要な課題であり、学問・研究の夢と魅力を伝える努力が必要である。まずは、支部の講演会やセミナー、若手交流会に参加した学生に、提言にもあった会費無料の準会員あるいはメール会員に登録してもらい、メールマガジンなどでの学会体験から始めてはどうだろうか。やがては年会・討論会での発表に繋がることを期待して。

[Hisanori IMURA, 金沢大学理工研究域物質化学系, 日本分析化学会中部支部長]